アンドロギュノス

〈登場人物〉
男（二五歳）
女（二七歳）

地下の薄暗いフロア。非常灯が瞬く。瓦礫。ロッカーや棚が倒れている。OL風の女、スラックスの足を前に投げ出し床に座りこんでいる。顔も髪も服も汚れ、疲れ切ったようす。
男の声で『アンパンマンのマーチ』のハミングが聞こえる。
上着もネクタイもつけていないが、サラリーマン風の若い男が異様な恰好で登場。両手にも靴を履き、仰向けの姿勢で腰を浮かせ、足の方を前にしてまるで虫のように這ってくる。

男　誰かいませんか？
女（身をすくませる）
男　いませんかあ？
女（小さなくしゃみ）
男　あ……（くしゃみに気づくが、女の居場所がわからない）。
女（男がきょろきょろしているのを見て怪訝な顔）
男　目が……僕、目がやられちゃって……全然見えないんです。最初はぼんやりとは見えてたけど、今はもう真っ暗になっちゃって。まあ、ここ、もとから暗いとこなんだけど……まいっちゃった。よりにもよってこんなときに……ドーンときて、頭、思い

切りぶっつけて……そのとき目玉と脳みそつないでる配線が切れたのかな……プツンって。

女　（ふきだす）

男　あ、今笑ったよね……女の人？

女　（口をおさえる）

男　いるんでしょ？

女　……。

男　僕ね、決してあやしいものじゃ……結構あやしいか（笑）……何せ見えないでしょ。だからすぐ転ぶし、頭、ぶつけるんですよ。もうガンガンぶつけちゃった。血が出てるでしょ……すごい顔になってるんだろうなあ。昔、プロレスにブッチャーってすぐ顔が血だらけになるレスラーがいたんだけど、あんな感じかな……（つぶやく）知らないか、プロレスなんて。

女　……。

男　あんまりぶつかるんで、この画期的な歩き方を考案したんです。四つん這いと違って、この姿勢だとほら、足が先に障害物にさわるから……結構きついんですけどね、腕が……気持ち悪いと思ってるんでしょ。まるで蜘蛛みたいって。

女　……。

男　見えなくなった分、耳の感度がよくなったんです。こそっという程度の、ほんのかすかな音も聞こえる。

女　（くしゃみ、大きく）

男　ほこりひどいんでしょ。僕には見えないけど、ほこりっぽいにおいがする……においにもひどく敏感になって……今までかいだことのないにおいが充満してる……においってのは一番原始的な感覚で、にお いの記憶はかなり昔のものまで残ってるんだって……初めてのにおいだ……いやなにおい。何ていったらいいか、たとえようがないにおい……それがどんどん強くなって。

女　……。

男　怪我、ひどいんですか……笑ってたから大丈夫かな……ここへくる途中、女の人にぶつかったんです……若い女の人、たぶん若いんじゃないかと思うけど……とても苦しそうで、「大丈夫？」って聞いたんだけど、はあはあ、息の音がするだけで、答えることもできないみたいで……見えないから、僕、どうしようもないじゃないですか。助けるとか、できないし……はあはあって息が……何もできない。たとえ目が見えても、何もできないかもしれないけど。

女　……。

男　声、出ないんですか？　のどをやられたの……そんなことないよね……そうやって黙ってるのは、僕のこと警戒してるんですか？　やっと話のできそうな人に会えたのになあ。

女　（低い声で）靴。

男　え？

女　靴……手に履いてる方の靴。

男　これ？

女　どこから持ってきたの？　苦しがってた女の人のじゃないの。その人の足から……。

男　違う！……違いますよ。これ、女ものじゃないでしょ……でもあなたのいうとおり、この靴は他人（ひと）のです。動かなくなった人のです。死んだ人のです。

女　死んだ人の足から……。

男　死んでました。ちゃんと死んでました。ちゃんと死んでたからことわりました。「すみません、もう必要ないでしょうから、お借りできませんでしょうか」って、ちゃんとことわった。

女　ちゃんとって……。

男　しょうがないでしょ……見えないんだから。

女　奪衣婆、知ってる？

男　だつえば？

女　三途の川にいる鬼婆。亡者の着物を奪い取るのよ。

男　同じだっていいたいんですか。死体の靴を借りてきた僕はその鬼婆と同じだって……そうですね。そうかも。でもね、ここはもう三途の川みたいなもんだ。死人も死にかけもごろごろしてる。僕やあなたのように口をきけるものなんていない。たぶんいないでしょう……僕、ずっと歌ってきたから。答えるでしょ、普通。口がきければ。

女　苦しがってた女の人に。

男　僕に何がしてやれるんです？　医者でもないのに。

女　何かしたんじゃないの？

男　え？

女　したんじゃないの？

男　何を？

女　言えないことよ！　口に出して言えないようなこと。

男　（わからない）……。

女　だったら何よ、それ！　どうしてそんなにズボンの前をふくらませてるの。どうしてそんなになってるのよ！

男　……これ？

女　彼女に何かしたんでしょ。

男　……そうか、それで返事をしなかったんだ。僕に何かされると思ったんだ。

女　したんでしょ。

男　そうか……。

女　したのね。

男　彼女ね、たぶん下半身つぶれてた。くわしいことはわからないけど。見えないから。

女　……。

男　そんなことするもんか、こんなときに。

女　こんなときだからよ。

男　壁にたたきつけられて、気を失って……気がついたらこうなってたんだ。そりゃ自分でもおかしいと思うよ。でも、一向おさまらない。気を紛らわせようとしてもダメ。前よりひどくなってる。血液がたまってパンパンのガッチガチ。女の人にはわからないだろうけど、これって結構つらいんだ。

尿道が圧迫されてオシッコも出にくくなってるし……。

女　うるさいっ。

男　コントロールできないの……脳から何か、分泌されてるんだろうな。アドレナリンとか、その手のやつが……こんなときになぜって、僕も考えた。それで一つの仮説なんだけど。

女　……。

男　聞いてます？

女　うるさい。

男　一つの仮説なんだけど、今、僕は生存が脅かされているわけ。僕という生命が滅びようとしてるわけ。だから本能が、種を存続させようとしてるわけ。山火事なんかのときに植物の種が……。

女　馬鹿じゃないの。

男　人間も生物なんだから。

女　だから犯すの？　種の存続のために。

男　露出して歩いてたら疑われてもしかたないけど、ズボンはいてるでしょ。大体、僕のはそんなに大きくない。なのにそういう状態だとわかるってのは、あなた、かなり男の股間に造詣が。

女　変態。

男　ああ変態です。変態で結構……じゃあ聞くけど、あなた、どうしてこんなところにいたの？　何してたの、ここで？

女　……。

男　御存じだと思うけど、ここは以前製品の倉庫だったのが、壊れた備品とか廃棄しなきゃならない書類や資料、何でもかんでも突っ込んでおく物置みたいになって、それがいつしかオフィスラブ御用達、就業時間中なのに我慢できないカップルの交歓の場になったんだ。薄暗いし、棚やロッカーが入り組んでいて身を隠すところもたくさんあるから、密かに愛し合うにはもってこいの……。

女　黙れ！

男　あれ、図星だった？
女　……。
男　会社の人でしょ？
女　違うわ。
男　違うはずない。このビルは地下一階まではエレベーターがあるが、ここは別の扉から階段で下りて来なきゃならない。それを知ってるのは会社の人間だけ。ここによその人は来ない。
女　そういうあなたは何なのよ。
男　僕ですか……気になります？
女　別に。
男　派遣です。
女　派遣。
男　あ、その見下した言い方。ということは、あなた様は正社員様ですか。それは失礼しました……僕は卑しい派遣野郎ですが、もう二年になります。長いでしょ。なぜか。仕事ができるからです。正社員様の三倍は働く。有能だから管理職にはいたって受けがいい。だが無能な正社員様たちからは嫌われる。いじめこそないが、無視される。オフィスラブなんてとんでもない。なのになぜここにいたのか。それはここが社内で唯一、心休める場所だったから。ここへ来る連中は互いに干渉しない。知らない顔してる。それがここのルール。ここでは上司も部下も、正社員も派遣もない。正社員でもいじめやパワハラにあった気の毒な子が一人で来ていた。もちろん話なんてしませんが……あなたはそういうタイプではなさそうだから、やっぱりお楽しみにやってきて。
女　一緒にしないで。
男　なにしろ見えないんで。声からして若い方と思ったんだけど、結構ベテランなんですか？
女　……。
男　ご同伴でもなさそうですが……。
女　男のくせにべらべらと。

男　派遣のくせにべらべらと。
女　そんなこと言ってないでしょ。
男　僕とどこかで会ってます？
女　いいえ。
男　五百人もいましたもんね。使えない社員ばかり大勢……みなさんどうしたんでしょうね。
女　知らないわよ。
男　携帯は？　僕の見つからないんです。捜そうにも見えないし。
女　持ってこない。
男　そうですか。そうでしょうね。あれば連絡するもんなあ。ここ、電波通じるし……でも誰かの携帯、借りたって……あ、もしかしてあなた、動けないんですか？
女　……。
男　動けないんだ。
女　……。
男　そうか、そうだよな。僕のこと嫌ならそっとどこかへ移動すればいいんだもの。そうしないってことは。そうか、動けないんだ。
女　こっちへ来ないで。
男　そっちなんですか。
女　……。
男　近づきませんよ……そういうの自意識過剰っていうんですよ。世の中の男は誰もかれも自分とやりたがってると思ってる。アイドル女優じゃあるまいに。それともアイドル並みにお美しい方なんですか？　いたっけなあ、あの会社にそんな美人。化粧のきつい、仕事のできない馬鹿女ばかりだった気がするけど……僕、派遣だからいろんな会社知ってるけど、おたくの会社、すべてにおいてレベル低いですよ。三流だ。
女　そんな三流会社に派遣されてるんじゃない。
男　一流どころには必要ないんですよ。
女　……。
男　はさまれてるんじゃないの？

女　え？

男　柱とか棚とか、そういうものに体がはさまれて動けないんじゃないかって聞いてるんです。

女　だったら助けてくれるの？

男　状況によっては。

女　はさまれてないわよ。

男　なのに動けないんですか？

女　……。

男　動けないのか……。

女　動けないわよ！　足がいうことをきかないの。両足とも。折れても傷ついてもいないのに動かないの。あなたと同じ。どこかの配線が切れちゃったの。プツンと。それでいい？　わかった？

男　背骨ですかね。

女　……。

男　他の人たちに比べたら僕らはましですよ。少なくも死にかけてはいない。

女　わからないわよ。このままじゃ、どのみち……。

男　あれからどのくらい経ってます？　僕、時計見えないから。

女　時計なんて壊れてる。

男　僕のは音がするから大丈夫だと思うんですが、見えます？

女　見えない。

男　そばへ行っちゃまずいですもんね。

女　……。

男　何時だろ。

女　いいわ、時計が見えるとこまでなら。

男　じゃあ、誘導してください。右とか左とか言って。

女　……右。

男　こっち？

女　もう少し右。

男　このくらい？

女　そう。

男　どのくらい進めばいいんですか。

女　一メートル……一メートル五十センチく

らい。

男、女に近づく。

女　ストップ！

男　はいはい……（腕をあげ）見えますか？

女　もうちょっと、右斜めへ三十センチ。

男　細かいなあ。

女　腕、ひねって。

男　こう？

女　逆。

男　このくらい？

女　そう……（時計を見る）三時四十五分。

男　（腕をおろし）三時四十五分か。あれ、何時頃でしたっけ。

女　あれ？

男　ドーンってやつ。

女　……十二時十五分頃。

男　お昼休み始まってまもなくだったものなあ。ということは、三時間半もたったのか……でも、誰か捜してるような気配はないし。

女　誰が捜してるの？

男　決まってるじゃないですか、救助隊ですよ。

女　救助隊なんか来るの？

男　来るでしょ、人がいるんだから。

女　ここ立ち入り禁止よ、一応。

男　実際みんな使ってるんだから。いわば会社の福利厚生施設みたいなもんでしょ。

女　上だってひどくやられてるんじゃないの。ここは地下だからかえってましなのかもしれない。

男　そうかこのビル、かなり古いし、耐震性ないだろうし。

女　きっとひどいことになってる。だからこっちまで手がまわらないのよ。そうでなくてもここのことなんて……。

男　上、瓦礫の山になってるかも。

女　……。

男　それを取り除いてからなんていったら、相当かかるなあ。
女　冗談じゃないわ。
男　冗談じゃないです。現実です。
女　あなた平気なの。
男　平気なわけないじゃない。でもどうしようもない。外のようすも見えないし。外どころか、このフロアの中だって……だから援けがくるまで待つしかないです。
女　何とか外に伝えられないの。
男　地下二階ですよ。すぐ上は無人の駐車場だし。大声を出したって、ガンガン音たてたって誰にも聞こえませんよ。
女　やってみたの？
男　無駄なことして体力消耗してもしょうがない。
女　やってないんだ。
男　……。
女　そこまで救助隊が来てるかもしれないのに。
男　来てればわかります。（耳をさし）こいつは今や高性能レーダーだ。針を落とした音だってわかる。
女　来ないわよ。
男　何ですか、来てるといったり来ないといったり。来ますよ。いつか来ます。どのくらいかかるかわからないが必ず来ますよ。
女　いつ？
男　一時間後かもしれないし、明日になるかもしれないし。
女　もっと先かも。
男　ええ、もっと先かも。
女　救助隊が来たとき、生きてるかしら。
男　生きてますよ。持ちますよ。空気がないわけでもないし、凍えるような寒さでもないし、熱中症になるような場所でもない。水さえあれば一週間や二週間。
女　水があるの？
男　あるはずですよ。トイレがあるんだから。
女　トイレがあるの？

男　ありますよ。みんな使わないようだけど。
というか、いつも閉まってるから（笑）。
女　閉まってるって？
男　入ってるんです。愛用者がいてね。ちらっと見たことあるけど、ありゃ確か総務の子だ。典型的ないじめられっ子タイプですよ。ひきこもってるんじゃないのかな。
女　ここから遠いの？
男　遠いといったってフロアの中ですから。
女　いざとなったら這ってでもいくわ。
男　ガラスの破片すごいですよ……それより大丈夫ですか？
女　何が？
男　いや、その……だから、トイレ。動けないんでしょ。
女　……。
男　はい、ごめんなさい。余計なお世話でした。
女　……。
男　あの子、まさかトイレに……。
女　え？
男　いや、あの子、常連だから。トイレにいたかも。
女　気になるの？
男　疎外されているという点では同類ですからね。大丈夫かな。トイレは頑丈だからつぶされないとは思うけど。出られなくなっちゃうこともあるし。
女　トイレから？
男　一人暮らしの人がトイレに閉じ込められるってこと、結構あるんですよ。地震でなくたって何かの拍子でドアが開かなくなる事故があるんです。窓でもあって外に助けを呼べればいいけど、そうじゃなければ悲惨。勤めてたり、友だちづきあいが多ければどうもおかしいってことになるが、近所づきあいもない年金暮らしのお年寄りなんて命取りだ。ドアを蹴破る力もないし。
女　トイレで死ぬなんてまっぴらだわ。
男　閉じ込められてるってことでは僕らも同

じですよ。空間があるから手足が伸ばせるってだけで。それにトイレなら水がある。トイレに閉じ込められた人も、そのおかげで生き延びたんです。脱水症状にならずにすんだ。ビルの倒壊で中に閉じ込められたとき、最も危険なのは脱水症状なんです。人は何もしなくても一日一リットル半の水を失うんです。それを補わないと、血液がどろどろになっていろんな障害を引き起こす。血栓になって心筋梗塞や脳梗塞を起こすこともあるし。

女　詳しいのね。

男　派遣の仲間に韓国人がいて、彼の親戚が三宝デパートの倒壊現場から救出された一人だったんです。

女　さんぼうでぱーと？

男　手抜き工事のビルが壊れて大勢閉じ込められたんです。十七日後に見つかった人もいて。

女　十七日……。

男　雨が降ったのか、放水したのか知らないけど水を含むことはできたみたいです。なかには段ボールを口にして……。

女　（吐しゃ反応、咳こむ）

男　どうしたんですか？

女　段ボール食べるとこ、想像しちゃったのよ。

男　ここ、段ボールならいっぱいありますよ。

女　やめて。

男　書類とか紙ばっかり。山羊ならいいだろうけど。

女　震災用の非常食とか、置いてないの？

男　あっても僕には見つけられない。

女　……。

男　トイレの話なんですがね。閉じ込められた人ってトラウマになるじゃないですか。それで必ず携帯を持ってトイレに入るんですって。そうなると防水じゃないとまずいですよね。

女　え？

男　水没したらまずいじゃないですか。僕、トイレで二度も落としてダメにしてるんです。

女　馬鹿みたい。ほんとに有能なの？

男　だから防水機能もついて特別頑丈なやつなんですが。

女　何が？

男　僕の携帯です。あれがあったらなあ。

女　見えないんでしょ。あっても使えないじゃない。

男　１１０番ぐらい何とか押せるでしょ。１１９か。それに……あなたに頼んだっていい。

女　あればかわりにかけてあげるわよ。警察でも恋人の所でも。

男　でも不思議ですよね。ここに携帯持ってきた人もいると思うんです。なのに……。

女　みんな、かけられないような状況なんでしょ。

男　着信音、一度も聞いてないんです。だってそうでしょ。誰かが心配してかけてくるはず。それがないってのは……。

女　あなたのはどうなの？

男　え？

女　あなたの携帯、特別頑丈なんだから着信音がするはずじゃないの？　それともマナーモードなの？

男　いや……。

女　冷たい会社の人たちはともかく、家族とか恋人とか。

男　恋人なんていません。

女　家族はいるでしょ。

男　こうなってることなんて知らないだろうし。

女　そうよね、まだ三時間だもの。そのうちかけてくるでしょ。そしたら閉じ込められてること伝えて、すぐ援けに来るようにいってちょうだい。ついでに私も助かるだろうし……着メロ、何？

男　着メロは……。

女　まさか……アンパンマンの。
男　元気が出るじゃないですか。
女（笑う）
男　そんなに変かな。
女　笑われない？
男　……たまに。
女　かかってきたら携帯がどこにあるかわかるだろうけど、私がかわりにとりにいけないわね。
男　足、全然ダメですか？
女　ダメ……たとえ救出されてもお先真っ暗だわ。
男　僕なんてほんとに真っ暗ですよ。
女　それ、一過性のものよ。配線がつながれば戻るわよ。
男　そっちだって。
女　私のは厳しい。
男　つながりますよ。
女　……。
男　これ（腕から時計をはずす）。
女　何？
男　預かってくれませんか。僕、持っててもいい意味ないし。いちいち腕をひねって見せるの、面倒だし。
女　大切なものじゃないの？
男　見えないし。ここから救助されたら返してくれればいい……どっちへ放ればいいか指示してください。
女　受けそこなったら壊れちゃうわ。もうちょっとこっちへ来て。手が届くところまで。
男　いいんですか？
女　いいわよ、もっと右。
男（移動しながら）もうおさまってますから。
女　何が？
男　ズボンの前。
女　馬鹿。
男（手を伸ばし）届きます？
女　はい。（手を伸ばし、時計を受け取る。互いの手がふれる）
男（手をひっこめて）おかしな感じ。

女　何が？
男　あなたが本当にいることがわかったから。
女　何よ、それ。
男　僕にはあなたが見えない。声も聞こえるし、そこにいる気配はする。でも、もしかしたら。
女　幽霊かも？
男　僕の頭の中に生れた妄想というか願望というか、そんなものじゃないという確信はないわけで。
女　……いい時計ね。
男　母親が買ってくれたんです。大学に受かったとき。
女　母さん、心配してるわよ。
男　田舎だからまだ知らないでしょ。
女　どこなの？
男　長野。
女　そっちは大丈夫かしら。
男　こっちよりひどかったりして。
女　一体どうなってることやら。
男　虫の息だった女の人。
女　……。
男　「母さん」って……。
女　彼女、もうダメなの。
男　ダメだと思う。
女　結局、私たちだけ？
男　たぶん。
女　……お墓。
男　え？
女　お棺。
男　……。
女　そうでしょ。死体があって。上からしっかり蓋がされていて。
男　やめてくださいよ。
女　違う？
男　僕ら、まだ生きてるじゃないですか。
女　生き埋め。
男　……。
女　ただいま四時十五分。
男　まだ四時間。

女　もう四時間。
男　……待つしかないじゃないですか。
女　待つのって嫌い。
男　……。
女　実はもうみんないなかったりして。
男　みんなって？
女　外の人たち。あれって、ほんとに地震だったの？
男　地震じゃなきゃ何ですか？
女　もっとすごいものじゃないの。
男　隕石とか。
女　ええ。
男　小惑星とか。
女　核とか……。
男　じゃあ、ここはシェルターだ。
女　みんな全滅してたり。
男　東京中？
女　日本中……世界中。
男　だったら、永遠に援けは来ないなあ。
女　そういうこともあるかなって……まだ四時間だし。
男　もう四時間。
女　……私ね、待ってたの。
男　え？
女　ここで待ってたの。
男　……。
女　不倫。
男　どうしてそんなこと。僕が派遣だから平気？
女　私たち一緒に死ぬかもしれないわけでしょ。というか、同じお墓に入ってるわけだし（笑）。
男　その人、来なかったんですか？
女　……十二時にここで待ってメールしたの。ここで変なことしようとしたんじゃないわよ。奥さんのこととか、いろいろぐちゃぐちゃしてたから。もうはっきりさせようと思って。
男　来なかったんですか。
女　……。

男　遅れてたのかも。
女　上の階で死んじゃったのかも。
男　……。
女　だって無事だったら、私があの時間にここで待っていること知っていたわけだから。
男　あ、そうか。
女　これ幸いと。
男　その人、怪我して病院なんですよ。重傷なんですよ。
女　（笑う）
男　おかしいですか？
女　かばうの？　憎っくき正社員よ。
男　関係ないです。会社もなくなってるでしょうから。
女　そうよね。
男　ここから救われても勤めるところないだろうなあ。
女　日本中、ないかも。
男　こんなんだしなあ。
女　……ねえ、この上の階、どうなってるんだろ。
男　駐車場には誰もいませんよ。管理人もいなかったし。
女　つぶれちゃったのかしら。
男　でも、何かあるかも知れないな。非常用の何かが。階段が壊れてなきゃいいんだが……。
女　せめてここから抜け出したいわ。
男　あそこなら外からの光も入るかも。まあ、僕にはあまり関係ないけど。
女　夜になったら、ここ、怖いわ。
男　駐車場から地上へ出る方法なんてないかなあ。
女　そんなのがあっても、二人とも行けないじゃない。
男　……そうだ！　そうだよ。
女　何よ、急に。
男　何でこんなことに気がつかなかったんだ！

女　どうしたっていうの？
男　あなたは、ちゃんと見えるんでしょ？
女　見えるわよ。
男　僕は歩けます。目以外はかすり傷程度でまったく問題ない。そのうえ僕は学生時代、ワンダーフォーゲル部だった。
女　ワンダーフォーゲルがどうだっていうの？
男　重いリュックを背負って歩くのは得意ってことです。
女　まさか……私を。
男　そう。あなたを背負う。あなたが僕の目になって右だ左だ、あと一歩だ二歩だって指図するんです。階段や障害物の位置を教えるんです。上の階へ出られるかもしれないし、水や非常用の品も探せるかもしれない。救助隊への連絡方法だって……。
女　ダメよ。
男　何もしませんよ、いくら存続の危機だからって。
女　ダメよ。
男　そんなに重いんですか？
女　失礼ね、四十二キロしかないわよ！
男　僕にふれるのが嫌なんですか？
女　違うわよ。
男　じゃあ。
女　……におうの。
男　汗臭いのくらい我慢して下さいよ。
女　……私が。
男　え？
女　しょうがないでしょ、動けないんだから。
男　ああ……。
女　動けないんだから。
男　……それでそばへくるなって。
女　濡れてるの。
男　気にするなっていっても無理か。
女　においに敏感なんでしょ。わからなかったの？
男　いいです。いいんですよ。汗のにおいとか、オシッコとか。だってそれ、生きてる

証拠なんだから。生きてる人のにおいなんだから。死んだ人のにおいに比べれば、オシッコのにおいなんていい香りだ。

女　オシッコオシッコっていわないで！

男　すみません。

女　おんぶしたら、背中、濡れちゃうよ。

男　いいですよ。でも……。

女　でも？

男　あまり胸とか押し付けないでください。

女　……またあそこが大きくなっちゃう？

男　たぶん。

女　いいわよ、生きてる証拠なんだから。

二人、近づく。手をつなぐ。女、男の背中に回る。男、女を背負うとゆっくりと立つ。

女　重くない？

男　平気です……（しっかりと背負い）合体！

女　もう、馬鹿（笑）。

男　知ってます？　ギリシャ神話だったかな。人間は最初、頭が二つあって手足が四本で背中合わせにくっついていたんです。つまり男と女がくっついてた。ちなみに男と男、女と女っていう組み合わせもあったようだけど。

女　何、それ。

男　ところが人間たちが神様をないがしろにしたんで、怒ったゼウスによって二つに裂かれてしまったんです。

女　ゼウスって、いい女と見ればすぐ手を出す神様でしょ。

男　それで男と女はかつての半身を求めあうのだそうです。

女　いろんなこと知ってるのね。

男　……ウォーミングアップ！

男、女を背負いその場を歩いて回る。ゆっくりと。

女　そうか、私たちは太古の昔、二人で一人だったのか。

男　……名前。

女　え？

男　名前を。

女　私の？　そういえばお互い名乗りもしなかったわね。名前も知らないのに、こんなにぴったりくっついてる。

男　教えたくない？

女　……そうじゃなくて、必要ないかも。

男　必要ない？（立ち止まる）

女　もしかして脱出口が見つかって、でも地上へ出たら誰もいなくて、私たち二人っきりってことも……。

男　二人っきり……。

女　そうなったら名前なんていらない。名前なんて意味がない。ただの男と女。

男　アダムとイブ？

女　そう。それも、いつもくっついてなきゃ生きていけない、神様に引き裂かれる前の人間。

男　アンドロギュノス。

女　え？

男　アンドロギュノスっていうんです。ギリシャ語でアンドロは男、ギュノスは女。アンドロギュノス。

女　アンドロギュノス……。

突然、着メロが聞こえる。『アンパンマンのマーチ』。

女　あ！

男　あ……（ほぼ同時に）。

着メロの音、大きくなって。

了